

## 「星を見上げた者達」

メリークリスマス！今日はクリスマスです。12月25日が日曜日になる年はそんなに多くはありません。でも、今日はこうしてそのクリスマス当日に、皆さんと共にこの礼拝を捧げることが出来ますことは大きな喜びです。今日はイエス・キリストの誕生に関わった博士を見てまいりましょう。まず最初に今日のテキストとなるマタイ2章1節－12節を拝読させていただきます。

1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。その時、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。6 『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を抱き、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

このところから今日はまず最初に「神を感じる」ということについて見ていきましょう。

### 神を感じる

ここには東の国から来たという博士が登場します。彼らは異教の国の占星術の学者で、天文学や数学の知識に富んでいる当時の知識人でした。彼らの仕事は星の動きを研究して、そこから未来を占うということでした。

彼らは壮大な宇宙を研究していました。動物学者ならその動物に実際に触れることができるでしょう。しかし、彼らの研究の対象は星ですから、その現場に行くこともできず、実際にそれを手にとって触れることもできませんでした。ただ彼

らはそれらを遠くから、そう彼らの手には到底届かないところから観察することだけが許されていたのです。

彼らは星の動きから、そこに秩序ある法則を見いだしたことでしょう。「秩序」の背後には「知性」というものがが必要です。なぜなら秩序はデタラメなものからは生まれませんからです。先日も夜空をながめましたところ、オリオン座がありました。星座に詳しくない私でもオリオン座なら分かります。このオリオン座、実は『あなたはプレアデスの鎖を結ぶことが出来るか。オリオンの綱を解くことが出来るか』（ヨブ38章31節）と聖書、ヨブ記の中にも出てきます。

私達が暮らすコミュニティーは時間の経過と共に変化します。子供の頃にあの場所にあった食堂がなくなって、今はセブンイレブンとなっているということがあります。その食堂の壁はこんな色で、お昼のコロケ定食がうまかったなんていう懐かしい話を私達はすることがあります。そう、かつてあった食堂を思い起こし、私達は懐かしむのです。

しかし私達がオリオン座を見上げる時、それは今から何千年も昔にヨブが見たオリオン座と全く同じものです。博士達もきっとこのオリオン座を見上げていたことでしょう。その一つ一つの星の間隔は変化することなく、私達は博士たちが見ていたものと同じ星座を今も見ているのです。その様に変化がないということは、そこにはそれを保ち続けた力と秩序があるということであり、そのことを成し続けておられる人知を超えた知性を私達は神と呼ぶのです。東方の博士達も日々、地道に星の観察と記録をつけておれば、自ずとそこに天の法則を見出し、その星の背後にあるサムシンググレートな存在に思いを寄せたことでしょう。このようなことを感じとることができる感覚というものを神は予め私達人間の中にインプットしているのです。

現代を生きる私達の上にも星はあります。しかし、私達にとりまして当時の博士達のように星は身近なものではなくなりました。私達の日常は忙しく、夜空を見上げる間にすべきことが山ほどあり、そもそも星が隠れてしまうほどに私達の野外には人が作った明かりが輝いているのです。ですから今の私達にとりまして星とは YELP であり、ミシェランなのです。Yelp の星は最高で5つ、ミシェランの星は最高で三つです。しかし、私達の頭上に広がる星の数は無限です。このスケールの違いが当時と今日の間がもちうる神概念の違いということになりました。

今年の日本語流行語大賞は「神ってる」という言葉だそうで、これは何か秀でている人間に対して向けられます。この言葉は最高に美味しいそばを食べた時に厨房でそばを作っている人に向けて言われます「なに！このそば、げきうま。あの職人さん、神っている」。捕球することが極めて困難な打球をキャッチした二塁手に向かって言います「あの選手、今日は神っているよ」と。

そう、これはそば職人であっても野球選手であっても他の人達よりも秀でている人間に向けられる言葉です。何か秀でている人間に対して気楽に「神」という称号をつけてしまうということ、このような言葉は無限の星空を見ることなくなくなった世界の産物なのではないでしょうか。

かつて世界大会を転戦していたというクリスチャンのプロサーファーが、サーフィンをすることによって神の存在を理解するのに助けとなったと言っておりました。何を言わんとしているのでしょうか。サーファーは一人、海の上でサーフボードに座って波を待つのです。しかしながら願っている時に願っている波はこないのです。言うまでもなく自分で波を起こすことはできません。そんな時、サーファーができることはただ一つ、その波を待ち続け、それが来たなら、それをとらえて、それにうまく乗ることなのです。広大な海の上でたたじっと波風が起きるのを待ち続けるちっぽけな自分、そんな者達が人間を超越した方の存在を感じることは難しいことではありません。

さだまささんの「風に立つライオン」という歌は、アフリカで実際に医療活動にあっていた実在の日本人医師のことを歌っている歌ですが、その中に「この偉大な自然の中で病に向かいあえば、神様について人について考えるものですね」という歌詞がありますが、まさしくそのとおりです。

しかし転じて私達自身を見れば、今日、周りを見回してもそのほとんどが人工物で、圧倒的な神の存在というものを感じる機会が少ない世界になりました。私達は夜空を見上げる時間もなく、とめどもなく増え続ける「すべきこと」に追われて毎日を過ごしているのかもしれませんが。今日の私達の生き方は神が定めた本来、人間が生きるペースというものから遺脱しているのかもしれませんが。博士達がたどった二つ目のことを見ていきましょう。それは「神について知る」ということです。

### 神について知る

聖書はこの博士達は東から来たと記しています。それは、どこを表わすのでしょうか。多くの学者はかつてバビロンがあった地方ではないかといいます。このバビロンはその後、ペルシアとなります。そこは今日のイランやイラクがある地域です（これらの国々が現代置かれている世界的状況を思う時に、これらの国々の先祖達がかつてイエス・キリストの誕生を求めて旅したということに何かとても深い神の摂理を感じます）。

バビロンという国はどんな国なのでしょう。そうです、あのユダヤ人達がかつて捕囚されていた国です。すなわちこの時から500年をさかのぼります、今から約2500年前に、そこには捕囚民としてバビロンに連れていかれた信仰の篤

いダニエルというユダヤ人がいました。神は彼を祝福し、捕囚民でありながらバビロンのネブカデネザル王に取り上げられ、彼は国の知識人を指導、管理する長官に就任しました。そのダニエルはダニエル書9章25節においてこのような預言を記しています「それゆえ、エルサレムを立て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が出るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい」。

詳しく説明することはここでは省きますが、このダニエルの預言に対して、こんな興味深いことを書いている人がいます。ここには7週と62週という数字があります。これを足すと69週となります。それを日にちにしますと69週×7日は483日となります。この日を年に変えますと483年という数字が出てきます。すなわちエルサレムを立て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君、すなわちイエス・キリストが出るまでは483年あるということです。

それでは「エルサレムを立て直せ」という布告はいつ出されたのでしょうか、その布告はバビロンの次に起きたペルシアのアルタシャスタ王によって紀元前457年にだされています。ダニエルは紀元前600年頃から紀元前540年ころまで、その働きをしていますから、驚くべきことに、このダニエルの預言から80年以上の年月が経過してから、この「エルサレムを建て直せ」という布告はだされたのです。そのような意味でまさしくこれは「預言」でありました。

そして、その時、すなわち紀元前457年にアルタシャスタ王によって出された布告から 先の数字の483年が経ちますと、それは紀元26年となります。イエス・キリストの誕生というのは厳密に紀元元年ではなかったと多くの学者が言っており、そこには紀元元年を境にそれぞれ前後5、6年の幅がありますので、それを考慮しますと AD26年というのはおよそイエス・キリストが30歳となりましたあたりとなります。

これら聖書に記されている数字に係する預言は深入りしますと時々、おかしなことになりますので注意しなければなりません、少なくともダニエルの「エルサレムを立て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が出るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい」という預言はイエスが世に出てきた時とぴったりと重なっているのです。

申しあげましたようにダニエルはユダヤ人でありながら、バビロンに捕囚の民として連れていかれた人ですが、その人格と聡明さにより、バビロンにおいても王に用いられ、高い地位にいました。そのダニエルの伝説はおそらくそれから600年経った後にもかの地には伝えられており、賢者であった博士たちもこのダニエルの伝説と彼が書いた文書、すなわちダニエル書の預言のことを知っており、その預言を心のどこかにおきながら、夜空を眺めていたのでありましょう。そして、その夜空に通常とは異なる星を発見したのでありましょう。ダニエルの「メ

シヤなるひとりの君が出る」という預言から換算して、その時をメシアが実際に公に世に出てくる時とするのなら、さかのぼって今はその君が誕生する時なのだという事を彼らは悟ったのでしょう。そうでなければ、彼らの過去のデータにないような不思議な星があらわれても、それとメシア出現と結びつけることはできません。

バビロン捕囚はユダヤ人にとりまして決して喜ばしいことではありません。しかし、歴史の全体を支配しておられるお方は「かつてのあの試練としか思われない出来事」を「今日のこの大切なことと」のためにお用いになるのです。

彼らは自分の仕事、すなわち星を研究することを通して神の存在を感じていました。その彼らの感覚に歴史的なダニエルの証言、すなわち言葉が加わったのです。実に博士はその時「神を感じる」という自らの感覚から、ダニエルの残した文書により「神について知る」機会を得ていたと思われます。同じように私達も今日、神の創造物を見る時にその背後にある偉大なる存在を感じ、聖書の言葉から「神について知る」ことが出来るのです。それでは最後のことをお話ししましょう。「神を感じる」、「神について知る」、そして最後は「神を知る」ということです。

#### 神を知る。

ユダヤを訪ねてきた博士を当時、その地域を統括していたヘロデは密かに呼び、言いました。「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と。博士達は王宮を後にしました。そして、東方で見た星が先立って進む後を追いつつながら、ベツレヘムに向かった彼らの前で星がとまったのです。聖書はその場面を「東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上にとどまった」と記しています。「ついに」という言葉には博士達が飼葉に眠るイエスを探すために文字通り長い苦勞多き旅をしてきたことを意味します。そして、同時に夜空を見上げ、その背後におられる存在というものを求め続けてきた彼らが、ダニエルの預言書に出会い、ついにその魂の終着点すなわち、そのお方がいるその場所にまで来たということを意味するでしょう。

確かに彼らは「神を感じていました」、「神について知っていました」。しかし、まだ彼らは神を個人的には知らなかったのです。彼らのこの旅は夜空の星に導かれた旅でありますから、昼間は移動できない、夜の旅であります。暗さの中の旅であります。それは彼らの心の闇をも意味していたことでしょう。すなわち、神を感じながら、神について知りながら、しかし、まだ神を知らないという闇です。しかし、その彼らはいよいよその夜明けに立ち会うことになるのです。

博士達は「その星を見て喜びにあふれた」と聖書はしるしています。この「喜びに溢れた」という言葉は、直訳すると「この上ない喜びを喜んだ」と訳せる文章でありまして、彼らの喜びの大きさというものを強調する文章になっています。

彼らは喜び踊ったのでしょうか。その星の下にいる幼子イエスを彼らは拝したに違いありません。彼らはやっと救い主イエスを知ったのです。そう彼らはイエス・キリストの前に立つことにより、イエスを知ったのです。

来月、遠藤周作さんの「沈黙」が映画として上映されます。その中で遠藤さんは『私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ』という言葉を書き残しています。そうです、キリスト教禁止令が出ている時代、ヨーロッパから来た神父も日本人の信徒も踏み絵を踏みます。その踏み絵を踏むということはそれまでの自分の信仰を捨てるということになります。しかし、沈黙にかかれていますこの言葉は、そのことすらもイエスの愛を知るために必要なこととなったというのです。

東方の博士は異教徒でありましたが、その異教の地で自らの生業としていた、これもまた異教的な占星術を通して、イエス・キリストに出会ったのです。それらのことがイエスに会うために不可欠なものとなったのです。この言葉には過去に私達が経験したいかなることであっても、それはイエスの愛を知るために必要なものになりうるのだといメッセージがあります。私達の経験がいかなるものであれ、それは神の愛を知るために無駄なものではないのだというのです。

もちろん、博士達はヘロデが「その子を見つけ出したら、自分に知らせるように」と言った言葉を忘れてはいませんでした。博士達はそれが何を意味するかを知っていたに違いありません。それゆえ彼らはヘロデの元には帰らずに、別の道を通して帰って行きました。彼らが別の道を通して帰ったということ、これは、彼らがそれまでの生き方を変えて、まったく別の道で生きる人間として、自分たちの国に帰っていたということ象徴する言葉でもあります。

博士達は神を感じ、神について知り、読み、学んでいたところから、イエスに直に会うことによって個人的に「イエスを知った」のです。そのイエスを知った彼らはそれまでの生き方とは別の生き方へと導かれたのです。その証拠にその時に彼らはイエスに黄金と乳香と没薬を捧げました。これは彼らが占いに用いた道具であったと言われていています。彼らがその大切な商売道具を捧げたということは、彼らがもはや星の動きによる占いによって自分の人生を支配されて生きるのではなく、神の贈り物であるイエスによって生きる者となったということなのです。

今日はクリスマスです。去年もそうでしたが来年もこの日がクリスマスであることは変わりません。クリスマスはいつもその年が終わる一週間前にあるのです。一週間後には新しい年がやってくるのです。取り方によっては、それは今年の残りの一週間、今一度、自分のことを省みる時であり、また新しい思いで新しい一年を始めるということになりますでしょう。

どうでしょうか。皆さんにお尋ねしたいのです。あなたは神の存在というものを感じたことがありますか。信仰というものがなくても、その思いを神は予め私達の心にそなえられました。創造者などおらず、人がアメーバーから進化したというなら、なんで人知を超えた存在のことを考える、そんな不合理な思いというものを私達の魂はもっているのでしょうか。そのような心があるということ自体、私達を造られた神がいるということを証明していないのでしょうか。

あなたはイエス・キリストについて知っているかもしれません。学校でキリスト教について学び、聖書を読み、学んでいるかもしれません。多くの人は聖書を座右の書としています。しかし、そのことは「神について知っている」ということであり、「I know about God」ということです。「神について知る」ということは次の段階、すなわち「神を知る」ということに進むプロセスに過ぎません。

ですから今朝、もう一歩先のことを皆さんにお尋ねしたいのです。あなたはイエス・キリストを知っていますか。その質問はすなわち、「あなたとイエスとの個人的な関係を知っていますか？」という質問に置き換えられます。その個人的関係はどこにあるのでしょうか。それはキリストがこの世界にこられた目的に凝縮されています。そう、それはこのキリストが人の姿をとられて私達の罪のために十字架にかかり死なれたということです。そして、甦られて私達にも永遠の命が与えられたということです。今、私は「私達」と言いましたが、実際のところ、それはキリストが人の姿をとられて「あなた」の罪のために十字架にかかり死なれたということです。そして、甦られて「あなた」に永遠の命が与えられているということです。キリスト教とは宗教ではなく、このイエスとの個人的な関係の中に生きるということなのです。

そして、そこに導かれるために、すなわち私達はその愛を知るために、異教の博士達がそうであったように、これまでの私達の全てが必要だったと受け止めることができるのはなんとというさいわいでしょうか。これは過去の自分の人生を肯定することができることです。このイエスの愛を知るために、これまでの自分はあったのだということ、そのことを思いめぐらすのなら、私達は確かにそうだったのだということに気がつかされるのです。

新しい一年が始まります。博士が神の愛を知るために、その日までのすべてが必要だったように、皆さんもその人生で経験してきた諸々のことを思い起こしてください。さいわいだったことも、困難と思われることも、一つ一つを思いめぐらすのなら、それらの全てが私達をイエス・キリストのもとへと招いてはおられません。そして、最後に申し上げます。我々にとりまして、このイエス・キリストを個人的に知るということ、それ以上に大切な人生のイベントは何一つないのです。お祈りしましょう。